ツーリズムとナショナル・アイデンティティ

増永 俊一　教授

今回の在外研究のテーマは、19世紀アメリカにおけるツーリズムの発展の経緯と、ツーリズムが同時代の文学や絵画に与えた影響を調査することでした。観光は時間のゆとりと経済的な余裕があって初めて成立します。アメリカにおいて人々の可処分所得が増え観光がブームとなり始めるのは19世紀初頭のことですが、主要な観光地はまずニューヨーク北部のハドソン川流域に展開していきます。同地における最初期の観光地はBallston SpaとSaratoga Springsでしたが、その名前から分かる通りいずれも温泉地で、当初は飲泉に励む転地療養が中心でした。その後観光地はさらに北部に展開し、エリー運河の開通によって西方にも広がり、アメリカ最大の観光地、ナイアガラの滝へのアクセスも開かれます。人々が期待したのは、ピクチャレスクやサブライムという美学の概念で表現される「大自然」に触れることでした。そして、人々はその雄大な自然にアメリカの国家アイデンティティを確認しようとしたのです。当時のアメリカ人はヨーロッパに対して文化的な引け目を感じていましたが、その広大な国土は誇らしく、ナイアガラは国家の潜在力を体現する最大の表象でした。

ハドソン・リバー派と呼ばれる画家たちはこぞって同地の雄大な自然を描き、作家たちもこの一帯を小説の舞台として取り上げましたが、ツーリズムは単なる余暇の一形態と言うことだけではなく、新興国アメリカにとってはそのアイデンティティ形成に深く関わる、絵画、文学をも巻き込んだ一大文化現象だったのです。文学で言えば、もっとも端的な例はW・アーヴィングによって書かれた「リップ・ヴァン・ウィンクル」でしょう。「西洋版浦島太郎」とも呼ばれるこの物語は、ハドソン渓谷に広がるキャツキル山脈を舞台にイギリス植民地時代からアメリカの独立への変化を描き出す、アメリカ誕生の寓話でもあります。その影響力は大きく、同地のホテルはこの物語を宣伝材料として利用し、架空の話であるのに「リップの小屋」という建物まで沿道に設え、観光客の想像力を大いに刺激しました。一方、アーヴィングは、有名観光地を物語の舞台として人々の興味を引き付け、売上げの向上を図るという、まさにWin-Winの関係性にあったのです。

添付の写真はTarry Town（NY）にあるアーヴィングのかつての居宅で、調査旅行で撮影したものです。前にはハドソン川が広がり、人々は帆船や蒸気船でここを遡上して、観光地に赴きました。写真では架線しか写っていませんが、ハドソン川と屋敷との間には今も鉄道があります。当時は蒸気機関車がここを走っていて、これもハドソン川流域の観光の発展に一役買ったのです。